

あの頃(近藤教授のこと)

著者	太田 正夫
雑誌名	日本文学誌要
巻	7
ページ	24-24
発行年	1961-12-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019052

で、弟子の特権（むかしの教師は、学生にお茶をふるまってくださいましたものだ。）を發揮させていただきたいものだと思わないではないのである。

あの頃

太田 正夫

思い出を書くというが、こわれるままに、近藤先生について回想してみれば、すぐ浮かぶことが二つある。

それは始めて、近藤先生を見た時のこと、一九四二年一月三十一日、私がまだ予科一年の時だった。小田切さんの『万葉の伝統』の出版記念会へ、私は当時、文芸学会で出していた『文藻』という雑誌の準会員だかとして出席した。その時、談いろいろ進む中で、小田切さんが、「『アンナ・カレーニナ』は、やはりおもしろいですね」と近藤先生に話を始めた。すると近藤先生は、わたしたちの方を見て、きょうは若い人たちが多いからあまり話をすすめないようにと、意味のことをいわれた。どういうわけだか、このことは、ばかに印象に残って、何ということもなく、時たま、ふと思いつくのである。まったく、それだけをふと思いつくのである。だらしないことにあとはすっかり忘れてしまっている。私たちのように、見慣れない始めての学生もいたわけもあって、そういう話し具合になつたのだと思う。『アンナ・カレーニナ』は、やはりおもしろい

なかつた時代というのが近藤先生とともに私の一つの思い出となっている。

もう一つは、戦後、学部へ進んでから、アルバイトに日文協の事務の手伝いをしていた頃、なかなかまだ栄養もじゅうぶんにまわらなかつたので、わたしは喫茶店にはいるとミルクをのんでいた時代のことである。近藤先生はもちろんミルクなど飲まない。コーヒーを好むことは有名である。委員会のあとなどコーヒー店に寄るのだが、そこで、私だけはミルクを飲むと近藤先生は、これをひどくきらいのうだ。先生には協力を欠くものとしてうつるらしい。そういう点、潔癖な先生がよくあらわれているのであるが、わたしとしては、腹を満たす方が大事で、この点に関しては、コーヒー文化人に協力する必要はないと、認めなかつたようなことを思いつくのである。このように思いつくことを書くにあたって、それが、学問にわたらず貧困であることをはずかしく思うものである。

あの頃その頃

美作 太郎

少し失礼にわたるような気もしますが、やはり「近藤さん」と呼ばせていただきます。その方が心持ちの上でしっくりするものから。